

「ら抜きことば」の発展の様相とその実態

朴 幸怜

要旨

「ら抜きことば」は実生活で幅広く使われている表現だが、「ら抜きことばは日本語の乱れ」といった否定的な認識がまだ残っているため、年配者相手や面接、教育などの改まったことばづかいが必要とされる場面では使わないのが礼儀とされている。

本稿では、「ら抜きことば」が本当に標準語において認定されていない「乱れたことば」なのかを研究するため、「ら抜きことば」研究の権威である井上史雄氏の文献を参考に「ら抜きことば」の定義と変遷を調べた。さらに、今日の「ら抜きことば」の実態を把握するためアンケートを行って「ら抜きことば」の諸相を調査し、分析した。

キーワード：ら抜き言葉、現代日本語、可能形

1. はじめに

筆者が初めて日本に来たのは平成25年の9月である。そして、日本に来てから、日本語を聞き、日本語を読み、日本語で話しながら得た一連の経験は、筆者の日本語に対する認識に大きな影響を及ぼした。それは、今まで大学で標準語だと教えられていた日本語が、実は、日本で実際に使われている日本語とはやや異なっているということであった。その中で、最も幅広く使われているのは「ら抜きことば」である。そこで本研究では、「ら抜きことば」がどのように形成・拡大し、今の形にまで変化してきたのかを調べたいと思う。さらに、今日の「ら抜きことば」の使用様相を研究するため、アンケートも行う。

2. 「ら抜きことば」

2.1 「ら抜きことば」の定義

井上(2005)によると、「見られる、食べられる」などの一段動詞からラが抜けて、「見れる、食べれる」のようになったものを「ら抜きことば」という(姫野・上野・井上 2005:150)。

松田(2008)は「ら抜きことば」を「東京語可能形変異」とも呼んでいる(ibid.: 111)。

2.2 「ら抜きことば」の登場

「ら抜きことば」が初めて記録されたのは、昭和初代である。「東京生まれの上流新生層」から広がったとされる。井上(2005)は、「国語学者中村通夫が体験として、そのころ東京山の手の旧制高等学校の学生たちが「来れない」「見れない」と言っていたことを記した」と述べている(姫野・上野・井上 2005: 150)。

2.3 「ら抜きことば」の伝播と拡大

井上 (2005) は次のように述べている。「東京の「ら抜きことば」は、実は地方から入ってきたらしい。文法学者松下大三郎 (1878 年生まれ) が、出身地静岡県の方言で「逃ゲレル、受ケレル、といふなり」と、明治時代に書いていることから、東海地方では、すでに「ら抜きことば」が使われていたと考えられる。」 (姫野・上野・井上 2005: 150-151)

一方、前後間もなく行われた、1949年の調査では、児童・成人とも「来れない」の使用率が10%、「食べれない」が2~3%という、わずかな使用率だった。その後広がり、20世紀末期の女子大生は、8割近くが使うとされている (姫野・上野・井上 2005: 150)。

また、1994年前後に全国各都道府県の中学生とその保護者を対象に行われたアンケートの分析結果を見ると、保護者の「ら抜き」の使用率は中部地方と中国・四国地方に際立っているが、中学生の「ら抜き」の使用率はさらに高まって、ほぼ全国的になっていることが報告されている (姫野・上野・井上 2005: 151)。NHKの調査によれば、ら抜きことばへの抵抗感の少ない地域は中国地方や中部地方など。大きい地方は、(東京を除く) 関東地方と近畿地方、ただし単語によって違う (井上・鎌水編 2002: 236)。

2.4 「ら抜きことば」の拡大の理由

今日のように「ら抜きことば」が広がったのには、2つの理由がある。受身・尊敬と可能との区別が付きやすいという明晰化と、五段動詞・一段動詞の可能の言い方がそろうという活用体系の単純化 (井上、2005) である (姫野・上野・井上 2005: 156)。

2.4.1 可能との区別

「ら抜き」が認められると、受身としての「見られる」と可能としての「見れる」で区別ができて便利だという意見がある。ことばの明晰化に向かう言語変化といえる。

古語の助動詞「ゆ、らゆ」には「自発・受身・尊敬・可能」の四種の用法があり、機能が多すぎた。こんなに多いと、どの意味で使われているのか分からず、時には誤解の恐れがある。その子孫である現代口語の「れる、られる」という助動詞では、様々な形で整理が進み、自発の用法は衰えた。そこで、可能の場合に「見れる」「着れる」を採用すれば、「れる、られる」には受身か尊敬の意味しか残らなくなり、誤解の恐れが減る (井上 2005、姫野・上野・井上、前掲書 2005: 151-153)。

2.4.2 尊敬との区別

一方、可能よりも尊敬との区別のために、「ら抜き」が使われるようになってという主張もある。井上 (2005) によると、方言の分布上、受身の「ラレル」は全国どこでも行われているので、受身と区別するためなら、「ら抜きことば」はどこでも生まれてもいいはずだが、

東海地方でいち早く「ら抜きことば」が生まれたことを考えると、別の原因があったからと考えられるという（姫野・上野・井上 2005: 153）。

つまり、「ら抜き」を先に採用した地域では、尊敬表現に「れる、られる」をよく使うということである。「先生見られますか」「（何時に）起きられますか」のように言う。東京の敬語なら「ごらんになりますか」「（何時に）お起きになりますか」などの方が自然だ。

「れる、られる」による敬語を使う地域と「ら抜きことば」を使う地域は中部地方や中国地方で、分布地図で見るとかなり重なっている（井上 2005、姫野・上野・井上 2005）。

2.4.3 言語の単純化

「ら抜き」は、五段活用と一段活用の区別をなくす方向なので、単純化といえる。江戸時代を通じて、「取られる、走られる」などの五段活用動詞の可能表現が「取れる、走れる」のように短くなる現象が広がり、近代以降には「来る」に影響が及んだ。これは、カ行変格活用動詞である「来る」が、不規則活用のパターンを示し、一語しか所属しない孤立動詞からして、五段動詞のすぐ次に変化を起こしたのだとされている（井上 2005、姫野・上野・井上 2005: 154）。

そして、近ごろ「ら抜きことば」として騒がれているのは、「見れる」「食べれる」などの、短い一段活用動詞の可能の言い方である。まだ長い一段動詞の「考える」「整える」のら抜き表現は普及していないようである（井上 2005、姫野・上野・井上 2005）。これも、「ら抜き」の拡大の理由が言語の単純化のためとされる一つの証拠である。

3. 「ら抜きことば」の実態調査

3.1 調査概要

「ら抜きことば」の実態とそれに対する日本語話者の認識を調べるため、アンケート調査を行った。調査対象は、東京都居住の日本人男女 87 人で、調査期間は 2014 年 6 月、東京都を中心に調査を行った。

3.2 「ら抜き」の使用率

表 1 は、年齢帯別使用者数とその割合を表したものである。20～30 代は 53 名が、40～50 代は 15 名が、60 代以上は 6 名が「ら抜き」を使っていると答えた。

表 1 年齢層別「ら抜きことば」の使用率

年齢層	使用者（人）	使用率
20～30代	53	98%
40～50代	15	79%
60代以上	6	43%

この結果から、「ら抜きことば」の使用に世代という要素が関与していることがわかる。興味深いのは、最も回答者の多い20～30代が使用率も最も高いということである。つまり、20～30代では「ら抜きことば」は標準語に他ならないと考えられる。高年齢層である60代でも約40%の人が「ら抜き」を使っていると答えた。

3.3 「ら抜きことば」に対する認識

図1は、「ら抜き」に関する認識が肯定的か否定的か調べるため調査した結果である。全回答者87人のうち、「気にならない」と答えた人は46人(53%)、「気になる」と答えた人は14人(16%)であった。注目すべき点は、「どちらとも言えない」と判断を保留した人が27人(31%)にも上ったこと、そして、「ら抜きことば」が気になると否定的評価を下した老年層の人がわずか3人だけだったという点である。これは、表1が示している、老年層の「ら抜きことば」の未使用率57%(使用率43%)よりも低い数値である。この結果から分かるのは、全世代で「ら抜きことば」の使用率が最も低い老年層であっても、否定的な考えはあまり持っていないということである。

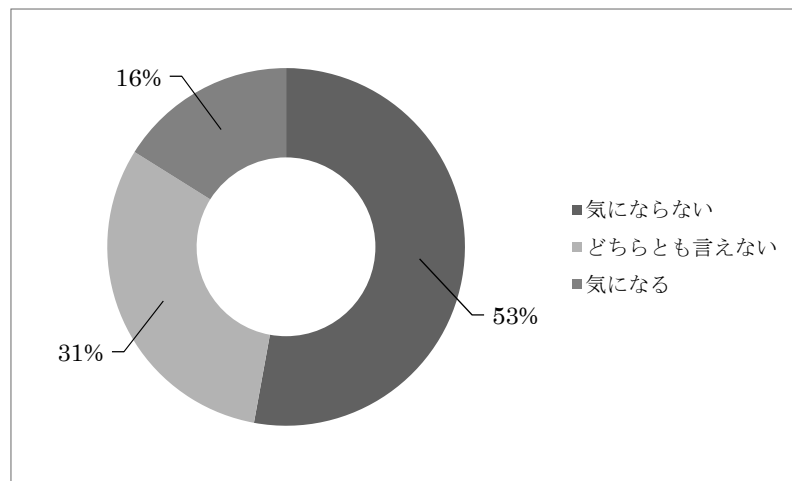


図1 東京都住者の「ら抜きことば」に対する認識

表2 年齢層別の「ら抜きことば」に対する認識

年齢層	気にならない	中立	気になる
20～30代	35 (64%)	11 (21%)	8 (15%)
40～50代	8 (42%)	8 (42%)	3 (16%)
60代以上	3 (21%)	8 (58%)	3 (21%)
回答者数	46	27	14

すなわち、「年齢層」によって「ら抜きことば」に対する認識に差があることは確かだが、その差はとてむずかで、世間によく言われている「お年寄りたちは、「ら抜きことば」を日本語の乱れだと思っているので、好きではない」という観念を否定する結果である。

この結果から解釈できるのは、60代以上の老年層が「ら抜きことば」の標準語化に順応する傾向を見せている事である。「ら抜きことば」の使用者よりも肯定的（+中立）認識者が多いことは、「使用はしていないものの、時代の流れによって標準語化しているため、別に嫌ではない」と言語の変化を受け入れている根拠になる。

3.4 動詞語幹のモーラ別「ら抜き」使用実態

図2は、動詞原形の語幹のモーラによる「ら抜き」の間接・直接使用者数を表したものである。ここで、A~Dは、順に動詞原形の1モーラ（A）から4モーラ（D）までを意味している。

グラフを見ると、A1からB3までの五つの使用者数は65~80名で、他の3モーラ以上のものに比べて高い使用者数を見せている。そして、同じC動詞（3モーラ）の中でも、C4・C5の使用者数が20くらい低いことが分かる。

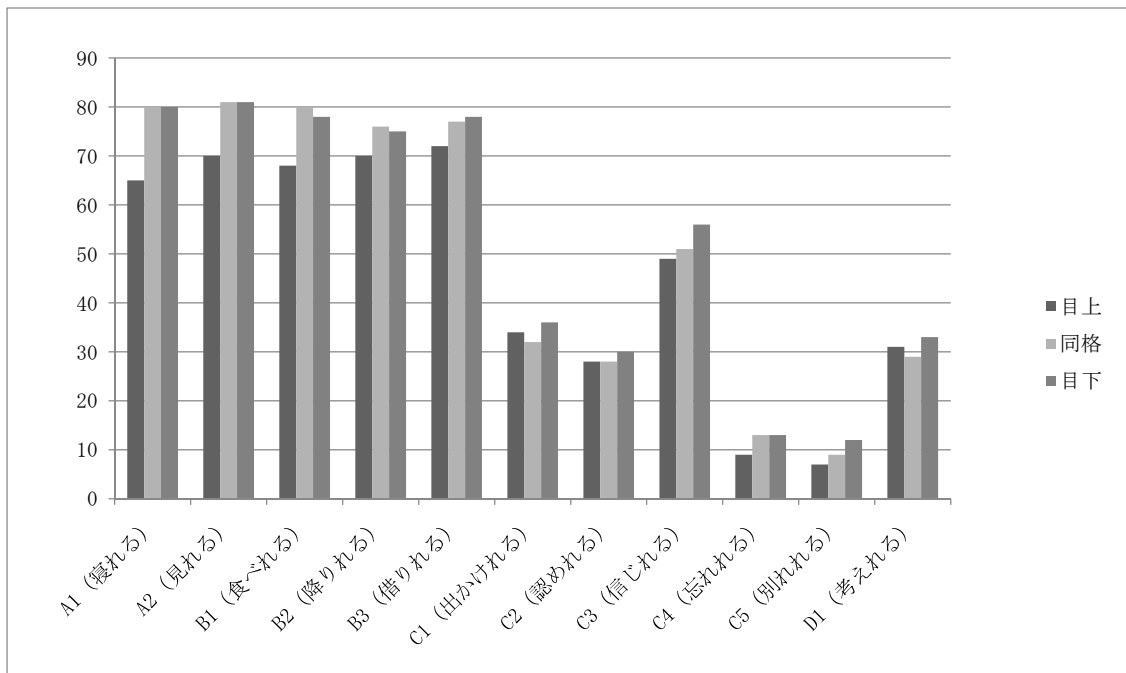


図2 語幹のモーラ数別の「ら抜きことば」使用者数

この結果から、

- (1) 動詞語幹の短いものほど「ら抜き」が使われやすい。
- (2) 短いモーラの動詞でも、下一段動詞（C4・C5）の「ら抜き」には抵抗がある。
- (3) 若干の差はあるが、概ね、目上から同格と目下の方に行くほど抵抗が薄い。

といったことが分かる。

4. 結論

本研究では、「ら抜きことば」の定義と登場、そして変化の初めから現在に至るまでの様相を調査し、分析した。分析の結果、「ら抜きことば」の使用率は全年齢層であまねく観測されたが、年齢層によって「ら抜きことば」の使用状況と認識が大いに異なっていることが解った。特に、老年層で観測された「ら抜きことば」の使用率と認識は、若者層とは異なり、予想に反するものであった。「ら抜きことば」に対して否定一辺倒の認識を持っているとされている老年層は、想像した以上に「ら抜きことば」に好意的だった。また、「ら抜きことば」が下一段動詞まで拡大されている様相が観測できた。

しかし、このような言語の実態や使用、変化状況などをもっと詳しく研究するためには少なくとも200人を越える被験者が必要となるが、時間的・費用的な条件により十分な調査、及び研究が行えなかった。次回の研究では、調査対象を今回より増やして、調査を行いたい。

参考文献

- 井上史雄・鎌水兼貴編（2002）『辞典 <新しい日本語>』東洋書林
姫野昌子・上野田鶴子・井上史雄（2005）『言語文化研究Ⅲ 現代日本語の様相』放送大学教育振興会
松田謙次郎編（2008）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房

調査資料

- 文化庁（1996）「平成8年度「国語に関する世論調査」の結果について」文化庁ホームページ
(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h08/kekka.html)（2014年7月現在）